## ずいそう

## カンボジアでの思い出



## 中川明彦

50年以上前になりますが、1960年代に、父の仕事の関係で3年間ほどカンボジアに住んでいたことがありました。最近では本田圭佑さんのサッカーチーム監督就任で話題になっている国です。このニュースのおかげで久しぶりに私も住んでいた頃のことを懐かしく思い出しました。以下個人的な話で恐縮ですが、当時のカンボジアでの生活のことを書せていただきます。

父は農業土木の行政官で水資源開発の指導が目的で 赴任した為に大使館付となり、そのため家族はかなり 裕福な暮らしができました。駐車場付きの2階建ての 豪邸に住み、二人のメイドさんと専属の運転手さんが 付き、車は独車で、ついでに飼っている犬もシェパー ドでした。日本にいた時の長屋の様な家での生活とは



図―1 カンボジア位置図



写真―1 現在のガンボジア市街

大違いです。カンボジアに行った時に私は小学校入学 前でしたが、今思い返すとこの人生初期の時点で経済 的には栄華を極めてしまった様です。近所の焼鳥屋で ちびちび焼酎を飲むのが楽しみの今の生活はまるで没 落貴族のなれの果てと思える様な変容ぶりです。

当時のカンボジアに住む日本人は民間も含めて 100 人程度で日本人学校など無く、日本語の読み書きは近所に住む日本の方から教わりながら、普段はフランス語学校に通いました。フランスは長くカンボジアを植民地支配していた関係でその当時も学校が出来るだけのフランス人社会が成立していた様です。そこにはフランス語を習わせたい親の思いからかカンボジア人の子供たちも多く通っていました。

学校では彼らから喧嘩を売られることも多々ありました。その理由は戦争にあります。第2次世界大戦中に日本はフランスからカンボジアを解放(略奪?)したのですが、敗戦により撤退した経緯がありました。つまりカンボジアの子供にとって私は敗戦国の子供なので嘲笑や因縁をつける格好の相手だったという訳です。

それでも我々アジア人を小馬鹿にしたような、あるいは冷たい視線を注ぐフランスの子供達よりは、感情がはっきりしているだけましでした。それに国民性のせいか、学校では敵視してくるのに休日にプールで会ったりすると嬉しそうに手を振ってきたりしていました。

基本的に友好的な人たちだったのでしょう。

それでも同世代の日本の子供がいなく学校での生活 はあまり楽しいものではありませんでしたが、それ以 外では親がいろいろなところに連れて行ってくれてい い経験ができました。一番のハイライトはやはりアン コールワット周辺でした。彫刻の精巧さや建築物のス ケールには子供だった当時の自分でも興奮しました。 また、江戸時代の日本武士がここまでたどり着いて壁 に残した落書きを見たことも記憶に残っています。

中でも最も印象に残っているのは、近くにある古代都市アンコールトムに築かれたバライと呼ばれる巨大な調整池です。今改めて調べると東西8km、南北2kmの大きさでした。

今でもスカイツリーより奥只見の人造湖に人間の英知を感じてしまうのは、アンコールワットの様な巨大建築物よりこの土木建造物に惹かれてしまった私の原体験によるものかもしれません。

小学校高学年になるとベトナム戦争が激しくなってきたことから、父を残して家族は日本に帰ることになりました。そのベトナム戦争の影響での大国の関与から70年代以降のカンボジアは長く悲惨な内戦の時代を迎えました。

私が住んでいたころのカンボジアはシアヌーク元首の下でアジアのスイスと呼ばれるくらいに平和な国でした。また、前述のように現地の子供達は穏やかな性格でしたし、多くのカンボジア人は温かく優しい人だったと両親も話していました。そのような人たちがなぜあのような悲劇に巻き込まれてしまったのでしょうか。

一緒に過ごしたメイドさんや運転手さんもこの不幸 に巻き込まれてしまったと思うと辛くなり、カンボジ アに住んでいたことを出来る限り思い出さない様にし てきました。



写真-2 アンコールワット全景(現在の状況)

ですが、会社をリタイアした後にでも、復興して昔のような平和を取り戻したあの素晴らしい国を確かめに行こうかなあと、本稿を書きながら思い直しています。

──なかがわ あきひこ ㈱荏原製作所北陸支社 支社長──

